



「今」を生きる力

〈京都府〉

まつおか しげなが
松岡 茂長 67歳

1年前、66歳で胃がんを発症した。医師からがんの宣告を受けたときは、もう家族とも未来を共にできなくなると、不安のどん底に突き落とされた。さらに、胃の摘出後は転移の恐れと、仕事にはもはや復帰できないという絶望感が入り混じり、気力も次第に失われていった。

そんなとき、病室担当の1人として看護学校に通うK君が現れた。彼は看護実習生だと言って、私の下着の着替えや面倒な洗髪など看護師たちを助け、献身的に尽くしてくれた。彼は九州から京都府の学校に入り、3カ月後の看護師国家試験に向け、実習をしながら猛勉強をしているのだった。「故郷で待つ母を早く安心させたい」と言い、徹夜の勉強もしていた。どん

なに疲れていても、笑顔で私を励ましてくれた。

あるとき彼は、私の着替えを手伝いながら「松岡さんは退院したら仕事に戻られるんですね」と聞いてきた。

「K君、私はもう戻れないよ」と力なく言った。実は、私は地方議員で政治家のはしくれだった。「政治家は病気をしたらおしまい」だといわれる。政治生命はがんの発病とともに終わったの思いから、退院後すぐに議員を辞職しようと考えていた。

次の日、K君が私のベッドにやって来て「松岡さんが社会復帰されること、私たち看護従事者にも力を与えるのです」と言った。私は目をつぶって聞いていた。看護師という厳しい世界に飛び込んでいくK君。目標を持ち純粹

な心でひたすら人に尽くすその姿が、自暴自棄になっていた私の心を動かした。

退院の日、お互いに目を見て握手をした。その後、私は1カ月だけ自宅で養生し、議員活動に復帰した。命の有限を知った手術後は、時間の質が違って見える。今日が最後の日になってもいいように、私は「今」を懸命に生きている。

ありがとうK君……。どこかの病院で、彼は今日も病む人のために奮闘していることだろう。